
月の光に恋歌を 番外編三 『待望』

きつねこぶた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の光に恋歌を 番外編三 『待望』

【Zコード】

N1641E

【作者名】

きつねこぶた

【あらすじ】

架空の中華風国、頃貴國。新たに起用される官吏の報告を受け、若き皇帝は心を揺らす。その中には、自分が今も恋い慕う姫を妻に迎えた青年の名があった ムーンライトノベルズ掲載の『月の光に恋歌を』番外編です。

第一話

頃貴国に春の兆しが見え始めていた。

雪解けと共に茶色の地面と若い新芽が顔を出し、これから訪れる季節を色づかせようとしている。

そんな時期、後宮に一人の人物が訪れた。

十二貴人の一人、翠候 翠 霸斬。

謁見の間で居住まいを正す彼に、女官が皇后の入室を告げる。膝をつき、首を垂れて、彼は上座に座る皇后を迎えた。上段の椅子に座り、紗の幕が下ろされて、よつやく顔を上げることが許される。

翠候は型どおりの挨拶の言葉を述べ、皇后の許しを得て、立ち上がりた。

「今日は、『ぐく私的な事でお呼びしたのです。』どうぞ氣を楽になさいませ」

皇后は微笑むと、幕を上げさせる。

最初の挨拶の時は形式に従つて、一人の間は遮断されるが、それが済んでしまえば、大抵皇后は直接話しかけてきた。臣下としてはもつたいたい限りだが、これも翠候の人徳の賜物といえよう。

彼は皇帝の信頼厚い重鎮で、常に國の為に尽くす忠臣として知られている。

皇帝ばかりか皇后、諸侯の信認も大変に厚かつた。

皇帝や皇后の私的な相談まで受けることもあるほどで 今日もどうやらそんな内容のようである。

皇后は女官に命じ、謁見の間のすぐ後ろに設けられた中庭に茶席を用意させた。

そこに翠候を導き、一緒に茶を飲もうと誘つ。

驚きながらも、翠候はありがたく座り、皇后からお茶を賜った。しばし後宮の話や皇帝の身辺のことなど、世間話をしていったが。

茶碗を置き、改まつた瞳で皇后は話を切り出した。

「このたびは、麗華姫の『縁談』が調つたとか。お祝いを申し上げます」

「恐れ入ります」

やはり来たか、と翠候は唇をゆがめる。

突然の呼び出しが、娘のことであろうと予想していたが、やはりだ。

今、皇宮はおろか都の端々にまで、翠家はうわさの種になつていたからだ。

十一貴人 翠候は皇帝の信厚く、その権力はゆるぎないものとして名を馳せていたが、彼の一人娘 麗華姫は都でも評判の変わり者として有名である。

元々は皇帝の寵姫、未来の皇后と呼ばれていた彼女だが、後宮を襲つた悲しい悲劇の事件のために、すっかり変わり果てた姿になつてしまつた。

姫とは思えない振る舞いの数々で、都はおろか地方にまで面白おかしく噂は飛び交い、なかなか縁談話も決まらなかつたのだ。

そんな彼女をやつと引き受けた相手というのが、なんと州に名をはせた女装癖のある男だということで、これも茶飲み話の一つとして、いろんな尾ひれをつけて広まつていた。

国一の権を誇る翠家でも、娘がこれでは将来は と、貴族達の間では、同情というより蔑みのまなざしが注がれる。

そしてそれだけでは終わらず、なんと翠候は、そんな婿を翠家の跡取りとして迎え入れ、皇帝の側に仕えさせようとしていた。

もはや翠候まで気が触れたのではないかというのが、最近の皇宮ではもっぱらの噂である。

後宮の奥に住まつ皇后の耳にも、当然噂は入つたに違いない。

愛する息子、皇帝の側に、そんな男がやって来るなどと、皇后にとつてはたまらないだろう。

自分に一言、二言、言いたい心境になるに違いないと、翠候は内心で溜め息をついた。

「なんでもお相手の方は、先々代の皇帝の御世に、大將軍として名を馳せた鳳家の血筋とか」

「はい。文武両道に秀でており、なかなかの逸材でござります。婿として申し分ない者と思つております」

翠候は済まして申し上げた。

皇后は睫毛を伏せ、軽く溜め息をつく。

「まわりくどい話はなしに致しましょう。翠候、わたくしは心配なのです」

「と申されますと」

「その婿になる人物について、かなりひどい噂が立つております。あなたもご存知ではありますか」

皇后は瞳をあげ、翠候をじっと見つめた。

「なんでもその者は、女装癖があるとかないとか、州に名を知らない者はないほどで、普段から女の姿でいるそうですね」

「……」

「更に男たちをその魅力で手玉に取り、男子でありながら男の崇拜者を多くお持ちだとか、女より男に興味があり、男色家との噂もござります」

「男色家ですか」

さすがにそこまでの噂は聞いていなかつたので、翠候は驚いた。

「更にかなりの我が僕者だとも、花嫁修業に入つた姫たちから衣や飾りを取り上げて、粗末な衣服と部屋を与え、朝から晩まで下女としてこき使い、服従しなければひどい暴力を振るうとか。何人もの姫を傷つけ、実家に追い返したそうではないですか」

「はあ……」

「いくら血筋が良く、学に武に秀でた者であつても、性格に問題あ

りでは困ります。そんな者にあなたは一人娘を『える』といつのですか。それだけでも言語道断なのに、翠家の跡取りにして、後の翠候にするなどと醉狂の至りです」

「……」

「そのような者を皇帝陛下のお側に置くなど、もつてのほか 翠候、どうか今一度お考え直しください」

真剣に訴える皇后に、翠候は少々可笑しなつた。

「皇后様、『心配には及びません。尊は尊 真実ではございません』」

「やうでしようか」

皇后は、疑い深そうに翠候を見る。

「陛下も 陛下も大層『心配になつていました。麗華姫のことですかから』」

皇帝のことを言われ、翠候も顔を曇らせた。

娘をいまだに皇帝が想つていることは、彼もよく知つている。

麗華が皇帝の想いを拒否したため、身を引いてくださつたのだが、心の奥にはまだ忘れがたいものがあるのではないかと、翠候も危惧していたのだ。

彼は口調を改め、皇后に言った。

「陛下にまで『心配をおかけして、本当に申し訳ございません。ですが皇后陛下』」

彼は真摯な瞳を、国一の女性に向ける。

「わたしは常に皇帝陛下の御為に動いております。今回の件もしかりです」

「え？」

「陛下のお側にいる諸侯、重臣たちは、皆、眞面目でよく働き、國のために夙々しております。ですが将来を考えますと、もつと優秀な人材が必要ではないかと」

「優秀な人材？」

「恐れながら、候家に生まれた者ならば、試験など受けることなく

無条件に高位につけます。重臣と名を馳せる者たちの子弟もそうです。勉学や武に秀でずとも、無条件に陛下のお側に仕えることが出来るのです

「それはそうですが」

「ですが、そういう者たちだけでは国が困難に陥つた時、陛下を支えるのは難しいでしょう。先を読み、市勢をよく知り、貴族たちの融和を保ち、時には自らの剣を持つて、陛下をお守りする者が必要です」

皇后は黙した。

翠候の指摘はあまりにも的確で、皇后自身も危惧していたことであつたのだ。

皇帝を支える十一貴人たちの中では、翠候が最も若い。

中にはそろそろ足腰が萎え、老後を迎える者もいて、その息子に全権をまかせて、表に出てこない候もいる。

跡取りの顔ぶれをみれば、皆、世間をよく知らない平凡な貴族ばかり。むろん少しは勉学もしているだろうが、平凡で特出した人物はあまりいなかつた。

野心もなければ欲もないが、その田その田を安樂に暮らせれば、それ以上の事には手を染めない者たちがほとんどで　こんな人材ばかりで皇帝はどうやって政を成すのだろうかと、心苦しく思つていたのだ。

「私は常々、陛下のお側に共にあり、良き理解者として陛下を支え、野心なく私心なく國のために仕えることの出来る者を探しておりました。幸いわたしには息子がおりません。なので誰はばかることなく優秀な人材を探し出し、養子として候の名を『』えることが可能ですか」

「では、この尊の主がそうだと」

「はい。彼は申し分なく陛下を支え、その懷刀となれる男です。ですがそれには条件が『』ります」

「条件?」

翠候の言葉に、皇后は目を見開く。

彼は微笑むと、皇后に言った。

「その条件は、いざれ陛下に奏上申し上げるつもりです。皇后様、どうぞお心を安んじられませ。必ず陛下は、国一の臣下をお持ちになられることでしょう」

翠候の言葉に、不安の残る表情ではあったが、皇后は静かにうなずき、話を終えた。

第一話

皇后との茶会の次の日。

朝の朝議において、科挙の事が議題に持ち上がり、朝議は活気付く。

「今年の科挙には、うちの息子が入りましてな」

「おお、それはそれは。さぞ優秀な成績を認められたことでしょう」「いや、それほどでも。でも内々のご沙汰で、都に配属されることになります」

「おや、それはおめでたい」

口々に自分の息のかかった者の話をする貴族達を、冷めた目で見やりながら、翠候は陛下のお出ましを待つた。

斎陽帝が入殿し、上座に着くと、さっそく本日の朝議が始まる。上官がつやうやしく巻物を陛下に捧げた。

「陛下、今年の科挙の結果にござります」

渡された巻物を受け取って、皇帝はうなずいた。

「今年は全国より一百一十名が受験、九十七名が合格となりました」「そうか」

上官は、更に口元にちらりと笑みを乗せて続ける。

「今年は藍候の妹君のご子息が、たいそう優秀な成績を取られました。本当にめでたいことです」

藍候が膝をつき、陛下に申し述べた。

「身内のわたくしが申すのも何ですが、大変優秀な者でござります。お側に置かれましたなら、きっとお役に立つのではないかと」

おそらく事前に打ち合わせてあつたのだろう。

上官と藍候は、上手く身内を皇帝に推挙した。

あまりにも魂胆が見えすぎて、斎陽帝は溜め息をつき、それは良かつたな、とつぶやく。

巻物を広げ、帝は目を通した。

やはり主席と副主席が気になるところだ。

藍候の甥は何番田なのかと田を走らせると、なんと五十位であった。

(一番でもないのに、随分な自信だな)

そう思い、また主席の名に目をやる。

(凰 龍焰……凰家か。聞いたことがないな)

都の貴族ではないようだ。

姓があるから平民ではないようだが、地方の貴族では、最初はせいぜい州富の最下官に配属されることだらう。

(第二位と大差をつけての成績だ。武門の結果も良い……惜しいことだな)

こういう優秀な人材こそ、自分の側に置きたいのに。

揺れる心を押し隠し、それでも興味を持つて、斎陽帝はこの名を口にした。

「主席は、なかなか優秀そうだな。 凰 龍焰 ビニの者だ」

皇帝の問いに、上官は顔をゆがめて答える。

「なんでもインファン州の貴族だとか。陛下がお心に詠めるほどの者ではございません」

田舎の取るに足らない男だらうといつ口づりに、斎陽帝は気分を害した。

「科挙の試験は、国の未来を担う重要な臣を選抜するものだ。国のために、皇帝たるわたしのために尽くそと日々努力して試験に臨み、主席となつた者を心に留めずして何とするー。この者の詳細をこちらに持て」

「は、はあ……」

上官は額に汗を浮かべながら、下官に命じ、一枚の調書を探させる。

それは科挙の試験を受けるに当たつて、本人の情報を各地方の塾より推薦書として作成し、提出したものだ。

「インファンの凰家 先々代の皇帝に仕えた大将軍の子孫か。な

かなかの家柄だな

「まあ、そうですな。一地方の貴族としてせまざまドジをこまし
よ」

藍候が、苦虫を噛み潰したような顔でつぶやく。

「次男か。履歴は、学問所の教師　　家族は家長たる父と兄と兄の妻一人……ん？」

斎陽帝は、最後に記された一文に目を通し、驚愕する。

（これは……）

手を震わせ、顔色を変える皇帝に、皆、怪訝そうな目を向けた。

「陛下？　いかがなさいましたか」

上官が、気遣つて言葉をかける。

斎陽帝は調書から目を離し、自分をじっと見つめる翠候に目線を注いだ。

「彼は、翠候、あなたの娘婿か」

「恐れ入ります」

澄まして一礼する翠候に、その場にいた全員が驚きのまなざしを投げる。

「まさか……今年の主席が翠候の？」

「例の姫の相手だと？」

「では、翠令息となる者だといつか」
ざわざわと朝議の場がざわめいた。

皆、翠候の娘婿のことは噂でいろんな話を聞いている。

しかし、まさか科挙の試験で主席になる程とは思ってもしなかったのだ。

斎陽帝は、改めて調書に目をやる。

自分と同じ歳の青年だ。

一体どんな男なのか。

調書にはわずかばかりの情報しか載っていないが、怪しい噂は斎陽帝の耳にも入っていた。

（女装癖を持ち、男色家で、我が侭な男　　）

だが調書の中には、そんな事は何一つ記載されていない。

添えられた推薦書きは前インファン州官長のもので、彼は無償で学問所を開き、身分、年齢を問わず、求める者に学を教えていたと書かれてあった。

（これを見る限り、優秀で比の打ち所のない者に思えるが ）

ではあの様々な尊の根拠はなんなのか。

斎陽帝は聞くか聞くまいが、随分迷った。

嫁の貰い手がなかつた麗華が没々入つた家であり、よもや彼女がすんなり嫁に行くとは翠家でも思つていなかつたと聞いている。

ところが麗華は、予想外にもその相手を気に入つてしまい、結婚を承諾したとか。

自分にも振り向かせる事が出来なかつたお転婆姫の心を、どうやつてもにしたのか 斎陽帝は気になつてしうがなかつた。

（麗華、君が選んだ男は、どんな者なのかな）

胸の奥が、じわりと妬かれて熱くなる。

（花嫁修行の期間を終えたら、君はまた都に戻つてくると思つていたのに……）

聞いたそうに顔をゆがめる皇帝を、翠候はじつと見た。

その表情の揺れる様を、一片たりとも逃さぬように視線を注ぐ。

本当はその壇上から降りて、翠候の胸倉を掴んで叫びたいことだらう。

変わり果てた娘とはいえ、斎陽帝にとっては永遠に心の中にいる少女である。業に出したのだ。

誰もが 皇帝でさえ、麗華がそんな相手と一緒にしようなどとは考えないと思つていた。

しかし麗華は相手に身も心も捧げてしまい、あまつさえその者は、この朝廷に入つてくるという。

想いかなわぬ愛しき姫の心を我がものにした男と、皇帝はこれが

ら手を取つて政を行わねばならないのだ。

それには、どれだけ心の痛みが伴うのか。

(陛下、これはあなたが名君となられるかどうかの試練でござつま
す)

翠候は、田で己の主に語りかける。

(貴方、自身のお心に打ち勝ち、この者の忠誠心を勝ち取るか、そ
れとも感情に負けて、朝廷に悲しみの雨を降らせるか)

己が家と娘の将来を懸けて、皇帝に差し上げる唯一の機会。

おそらくここで、この青年の心得なれば、斎陽帝の治世は一
生孤独に終わるだろう。

まわりにいる貴族たちは皆、皇帝の心を理解するにもなく、自
分の名声と富、家のことしか頭にない。

だがこの凰 龍焰は違うと、翠候は確信していた。

(民を知り、国に忠義を發揮する力を持っている。更にほんくらな貴
族の子弟と違って、国一の優秀な知識と武技を持っているのだ。こ
う二つの忠誠を勝ち取れる皇帝でなければ、国がどうして起ち行
く(ひづけ)

翠候の田線に何かを感じたのか、斎陽帝はふつと表情を緩めた。
そして調書を上官に返しながら、言葉をかける。

「頼もしいことだな。わたしの側にこんな優秀な者が来るとは
彼に会う田を楽しみにしているよ

「お言葉、嬉しく思います」

翠候は微笑んで、一礼した。

他の貴族たちは好奇な田線を投げかけてきたが、皇帝がこれ以上
何も言わなかつたので、翠候の娘婿の話題は、ここで終了となつた。

朝議のあと、翠候は皇帝に謁見を求めた。
すぐに許可があり、皇帝の宮に参内する。

昨日と同じように茶器が調えられ、皇帝が自分とじばらべ話をしそうと思つてゐることが感じられ、翠候は頬を緩めた。

彼が居間に膝をつくと、斎陽帝は暖かな笑みをみせた。

「立つてくれ。わたしはあなたを身内同然に思つてゐるのだ。堅苦しい挨拶はなしにして、座つてもらいたい」

「恐れ入ります」

下官が入つてきて、茶を入れ、菓子を添えて翠候の前に出す。ありがたくそれをいただきながら、翠候は己の主が口を開くのを待つた。

斎陽帝は、ふと溜め息を漏らす。

「翠候、あなたには本当にいつも感謝している」

「陛下」

「足りないわたしの側に仕え、わたしのために動いてくれる。そんなあなたの決断はいつも間違いがなく、常にわたしのためを思つてくれていることは承知している」

「もつたいないお言葉です。臣として、わたしは当然の事をしていりますまで、陛下のような方にお仕え出来て、わたしこそ嬉しく思つております」

頭を下げる翠候に、斎陽帝は悲しげな瞳を向けた。

「でも、正直に言つて、今回あなたの決断は、わたしには少々心苦しいものがある。わかつてもらえるか、翠候」

「……はい」

斎陽帝は瞳を揺らし、寂しそうにつぶやく。

「麗華の選んだ相手といつだけでも胸が痛い。彼女を思いきれたつもりでいたのにな」

「……」

「わたしは、あきらめたつもりだったのに、やはりまだ彼女を……俯き、斎陽帝はあるで自分自身に語りかけるようにぽつりと言葉を漏らした。

「彼女には、誰よりも幸せになつてもらいたいのだ。わたしが幸せ

に出来ないのなら、せめてわたし以上の男にめぐりあつて欲しい。このわたしを完膚なきまでに打ちのめし、かなわないと思わせるような者に」

「陛下」

「彼は鳳龍焰は、そのような男なのだろうか」

顔をあげ、真剣なまなざしを向けながら、斎陽帝は問うた。

その瞳の奥に潜む辛い心を肌身に感じ、翠候も真摯な瞳で答える。

「陛下。それはどうか陛下ご自身の用で、お確かめくださいませ」

「……」

「もうすぐ彼は陛下の前に参上いたします。その場で、陛下が直接お確かめいただくのが最良かと」

「翠候」

「ただこれだけは申し上げておきます。彼はあるの不肖の娘の心を捉え、身も心も捧げさせ、このわたしが翠家を与えるにふさわしいと判断した者です。そして陛下のお側に必要な人材と、わたしが認めた者なのです」

「……」

「陛下のお側には、優秀な臣下が必要です。残念ですが今の朝廷に、そのような資質を持つ若者はおりません」

翠候は、溜め息をついた。

「上流貴族の子弟ばかりろくに努力もせず、世間を知らず、財を使うことのみに体を動かす。己の身辺や実績は、金にまかせて優秀な下官を雇つて守らせる。そういうことばかりに長けていっている者では、この先、国はどうすれば良いのでしょうか」

斎陽帝は、睫毛を伏せる。

自分でもそれは思つていた事だつたので、鋭い指摘に何も言えなくなつた。

「更に陛下のお心に配慮し、側で話し相手になつるほどの者でなければなりません。わたしが調べた限りでは、彼は州都では大層人望が厚く、どうやら人の心を捉える魅力があるようです。彼を慕う

平民たちが多く居ると報告を受けました

「そうか」

「平民だらうと皇族だらうと貴族だらうと、すべて人間なのです。平民にこれだけの人望があるのなら、朝廷において貴族たちの間をうまく立ち回り、融和を計るなどたやすいことでしょう。頭もよく、策に長けるとの報告も受けています。政を行つにしても、良い知恵を出してくれるのではないでしょうか」

「そんな者だとありがたいのだが」

「こんなことを申しあげたら不快に思われるかもしませんが、わたしは大変彼に興味を持つております。おそらく陛下もそうなられるのではないかと期待しているのですよ」

「期待？」

「陛下に、うちの娘のことなど忘れさせてくれるような魅力的な人物ではないかと」

翠候の言葉に、斎陽帝は少々複雑な顔をする。

「……わたしには、そういう趣味はないぞ、翠候」

憮然として答える斎陽帝に、翠候は微笑んだ。

「もちろん存知あげてあります。でも色恋抜きにして、魅力的な者といつのはあるのですよ、陛下」

「そういうものか」

「はい」

青年らしくどこか納得いかなげな顔の斎陽帝を、翠候は暖かな目で見守った。

(うちの婿は、おそらく陛下の心をも捉えるに違いない)

そしてそれは皇帝にとつて吉となるか、凶と出るか。

「彼は陛下の良き理解者、忠臣となることでございましょう。ですがそれには条件がござります」

「条件？」

「はい。彼の心を陛下が得られることです」

「鳳龍焰の心を？」

田をまたたかせ、斎陽帝は翠候を見た。

「そうです。彼の忠誠心を勝ち取らねばなりません。陛下の人徳で」

「……」

「彼はお側に群がる苦労を知らない貴族達と同じではありません。貴族の身分を捨てても、国を捨てても、十分に生きていける実力を持つ者です。そんな力を持つ者を側につなぎとめておこうと思われるのなら、陛下の暖かいお心で彼を感動させ、生涯お側にありたいと思わせねばならないのです」

斎陽帝は沈黙した。

そのようなことは、考えたこともなかつたのだ。

「陛下、貴族にとつて、陛下にお仕えするのは代々の習慣となっています。こんなことを申し上げてお心を害されるとは思いますが、たとえ玉座に座っているのが物言わぬ石であつても、顔色を変えず、仕えることが出来るのです」

「随分な言葉だな」

斎陽帝は、苦笑しながら答える。

「ですが民は、そういうわけにはこきません。財を持たぬ分、彼らは生きる強い力を持つています。陛下のお側にいることを不快に思うなら、自らどこへでも行つて暮らすことが可能だとわかっているのです。だからこそ心を得る必要があります。凰 龍焰は貴族ではあります、が、平民と苦労を共にし、生きて来た者 朝廷の中でいかに出世し、甘い言葉で自分を良く見せるか、そんなことばかり考える者たちとはわけが違います」

「そうだろうな」

「そこに価値を持たぬ者ゆえ、陛下のお心に価値を見出させなればなりません。そうでなければ彼はいつでも翠令息の身分を捨て、うちの姫の手を引いて、どこなりと去つてしまつでしょう」

翠候の言葉に、斎陽帝は田を閉じた。

頭の中で、今、言われた言葉を反芻する。

田をあけ、再び翠候を見たとき、斎陽帝の瞳には力が宿っていた。

「翠候、あなたの言いたいことはよくわかった。わたしは一国の皇帝として、彼にふさわしいと認めさせてみせよう。感情に流されることはなく、民のために真に死すべし忠臣を手に入れてみせる」「おわかつて、嬉しく思います、陛下」

翠候は、嬉しそうに笑みを返し、一礼した。

少女が笑っていた。

『綺羅 つ』

明るい声、まぶしい笑顔。

桃色の想花を抱え、軽やかな足取りで自分のところに駆けてくる。触れたくて、手を伸ばすと、その幻影は、突然消えた。驚いて、目を凝らす。

辺りに静かな楽の音が響き、淡い螢の光が舞い散った。

(ああ……これは……)

溜め息と共に前を見ると、月光と螢に囲まれて、少女が煌きながら踊っている。

本当に楽しそうに、彼女は白い布をひらめかせ、指先までピンと伸ばしてしなやかに舞っていた。

あの口と同じように。

「つづらと瞼を開けると、そこには豪奢な天蓋の下だつた。

斎陽帝は身を起こし、まだ夢の余韻が残る胸に手を当てる。

(あんな夢を見るなんて)

体が汗ばんで、心臓が音を立てる。

彼は溜め息をつくと、横に眠る口を起しきるよに寝台から降りた。

衣を羽織り、寝室から居間に入ると、卓の上に窓から月の光が差している。

まるで、斎陽帝に卓の上の物を指示するように。

そこには、巻物がいくつか載せられていた。

彼は卓に歩み寄ると、巻物の一つを取り上げる。

じつとそれに目を注いだ。

(やはりこれのせいなのか……)

その巻物は、今年の宣旨を記したものだった。

本日、國の全土で皇帝たる彼の名において、宣旨が下される。國の中核を守る重臣から、末端最下級の下官にいたるまで、すべての官が彼の命を受けることになるのだ。

そして今年は特に、斎陽帝にとって見逃すことの出来ない者が、國の中核に入つてくる。

彼にあんな夢を見せた原因となる人物が 。

彼は巻物を卓に置くと、静かに部屋を出て、中庭に立つた。

眠気は吹き飛び、心は天にかかる月を彷徨う。

今、彼の心を占めるのは、收まりきれない自分の感情。ずっと隠してきたはずなのに。

忘れていたはずなのに。

もう一度と、そうは想わないと決めていたはずなのに まだ未練があるのだろうか。

(麗華……)

斎陽帝は、煌々と光りを注ぐ月を見上げた。

彼女は、この月のように闇でも明るく輝いて、自分の中から永遠に消えることはない。

(もうすぐ帰つてくるのだな。都に……一人ではなく)

自分の元を離れ、麗華は随分変わったと聞いた。

揉め事ばかり起こし、剣を振り回し、貴族の姫とは思えない荒んだ娘になってしまったとか。

今、どうしているのかわからないが、そんな彼女もついに結婚するという。

(君が選んだ男は、一体どんな者なのか)

どんなに愛しても、決して受け止めてくれなかつた少女。

そんな彼女が、心を決めた者とは 。

胸の奥が疼いた。

麗華は、国の最高峰、十一貴人と呼ばれる候家の姫。

彼女の夫となる男は、皇帝たる自分の側で、政の一端を担う者となるのだ。

彼にとつても、とても重要な人物になる青年。

(凰 龍焰か)

その名を胸の内でつぶやいて、斎陽帝は月を見上げた。
(来るがいい。そしてその身を持って、証明してみせてくれ。麗華が選んだ夫としての証を、そして翠候が認めたその資質を)

月が真上に来たのを、ぼんやり眺めていた斎陽帝の背後から、柔らかな声がする。

「こちらにいらっしゃったのですね」

近寄つてくる女性に田を留め、斎陽帝は優しく微笑んだ。

「祐璃」

自分が愛しいと思い、選んだ少女。

麗華を失つて悲しんでいた心に、安らぎをもたらしてくれた存在。彼女は、すっと近寄ると、彼に寄り添つた。

「もうお休みになりませんと 明日も早いのだけれどいましょう」

「ああ、そうだな」

そう言ひながら、斎陽帝は祐璃を引き寄せ、頬に唇を寄せた。

「知つているかい？ 祐璃」

「はい？」

「麗華が 彼女が結婚するそつだ」

斎陽帝の言葉に、祐璃は顔をゆがめた。

「……陛下」

気遣うようにまわされた腕に、斎陽帝は想いを込めて白らの腕をからめる。

「心配しないでいいよ。わたしには君がいる。麗華を失つても、わ

たしはちゃんと安らぎを得られる。そつだろ?」

柔らかな彼女の温もりが伝わってきて、斎陽帝は胸の奥が熱くな

つた。

祐璃を抱きしめて、彼はささやく。

「翠候から麗華の相手の話を聞いて、ほっとしたんだ。最初は、随分噂のある青年らしいから心配したんだけれど　どうやらかなり魅力的な人物らしい。あの翠候が興味を持つてるぐらいだからね」

「まあ、そうなんですか?」

「ああ。だからわたしもとても関心があるね。一体どんな男なのか

早く会つてみたいものだ」

斎陽帝は、愛しい后に接吻しながらささやいた。

「あの麗華をものにした男なんだ。きっとこのわたしよりも、すぐい青年に違いないよ」

「そんな……陛下と比べられる者などおりませんわ」

憂い顔で彼を見つめる祐璃に、斎陽帝は暖かな笑みを向ける。

「そう言つてくれるとは嬉しいね。麗華はわたしを選んでくれなかつたけど、君はわたしを選んでくれた。心から感謝している。今、君がわたしの横にいてくれて」

「陛下」

祐璃は、彼の優しい言葉に頬を染める。

恥じらいながら、彼女は身を摺り寄せた。

二人は互いの想いを噛みしめながら、静かに抱き合つて温もりを与え合つ。

淡い月が、彼らを天上から優しく見下ろしていた。

雪がすべて消え、都に花開く時。
ついに彼は、朝廷にやってきた。

高貴な瞳を輝かせ、自信と力に満ちた、美しい青年。

凰 龍焰は、翠候の期待以上に皇帝の忠臣、友となり、後の世にまで名をはせるほどの人物になった。

斎陽帝と共に国の発展に大きく貢献し、第十四代翠候としての責務を見事に果たし、人生を全うしたと伝えられている。

そして彼の心を得ることが出来た斎陽帝も、高徳の皇帝と呼ばれ、かつてない繁栄を国にもたらした。

二人は身分を越えた良き理解者、友となり、生涯を国に捧げて生き抜いたと、歴史の書には記載されている。

終わり

第三話（後書き）

『後書き』

「こんにちは。きつねごぶたです。

このお話は、ムーンライトノベルズに投稿しています『月の光に恋歌を』の番外編です。

なので本編をお読みでない方には、何がなんだかわからないと思いませんが、番外編ということで、どうぞご容赦くださいませ。

本編は、このお話に出てくるお転婆姫の花嫁修業の物語となっています。

お話のとおり、彼女の婿は、最初はとんでもないお人でしてそのような人物を、何故姫の父たる翠候が婿養子にし、皇帝のお側に上げようと決意したかを書いてみました。

本編を彩る作品となっていましたら良いのですが……。

最後までこの一読、本当にありがとうございました。

きつねごぶた 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1641e/>

月の光に恋歌を 番外編三 『待望』

2010年10月8日13時39分発行